

## 第一章

黒崎ヒロシは電話の音で起こされた。

六時ごろに一度、目を覚ましたが、今日はバイトが休みなので、しっかりと朝寝を満喫しようと心に決め、昼頃まで寝るつもりで再び目を閉じたのだ。

しかしその思いは無情にもバイブの音により阻まれてしまった。

ったく誰だよ、もう！

気持ちよく寝ているところを起こされたのだ。彼の気分がいいはずがなかった。

寝ぼけ眼でスマホに手を伸ばすと、やはり姉の<sup>かほ</sup>夏帆だった。嫌な予感がしていたのだ。夏帆はいつも気まぐれに電話をかけてくる。

「はい……」

これ以上ないほどローテンションな声を送った。お前の電話に出るのは死ぬほど嫌なんだぞ感が夏帆に伝わるようにだ。

「なによ、あんたまだ寝てたの？」

無意味にテンションの高い声が、ヒロシの脳に響いた。

「勝手だろ、なんだよ」

「バイトはどうしたの？」

まるで母親のような口を聞いてくる夏帆にはうんざりだった。

「今日は休みだよ。なんの用だよ」

「今日さ、仕事終わりにあんたどこ行くからね。適当に食いもん買っといて。じゃあね」

「はあ？ おい……」

四の五の言わせないのがいつもの姉貴だった。自分の言いたいことだけ言って切ってしまう。本当に自分勝手な奴だった。

だいたい、来る立場で「食いもん買っとけ」って意味わかんないし。ヒロシはそんなことをブツブツ言いながらまた布団にもぐり込んだ。

彼には二人の姉貴がいた。今電話をかけてきたのが、一番上の姉で、二十五歳だった。

その下には<sup>しずね</sup>志津音という姉がいる。志津音は二十三歳で、ヒロシは二十歳だった。

同じ姉妹でも夏帆と志津音はまったく違った。

夏帆は自由奔放な性格で、我が道を行く女だった。志津音はおっとりとしていて、優しい物腰で人当たりもいい。少し優柔不断なところがあるが、ヒロシは志津音の方が好きだった。

というのも夏帆の方はとにかく自分勝手に、ヒロシに対する当たりもきついのだ。言っていることは正論なのだが、自分の考えを押し付けるところがあり、普段から苦手に思っていた。で

できればあまり一緒にいたくはない。一緒にいて気を遣わないのは断然、志津音の方だった。

志津音はいつもヒロシに対して優しく声をかけてくれる姉だった。ヒロシを呼ぶときも、夏帆は「ヒロ」と呼び、志津音は「ヒロくん」と呼ぶ。

夏帆の場合は「オマエ」と言う時もある。それが女の言葉遣いかと思うこともしばしばあった。ヒロシは今、アパートを借りて一人暮らしをしているが、実家で暮らしている時は、夏帆にさんざん教育された。

頭を殴られることはしょっちゅうで、ビンタをされたことも一度や二度ではない。父や母よりも怖い存在だったのだ。そんな関係を傍で見ている志津音はいつも仲に割って入り、ヒロシを守ってくれた。

「お姉ちゃん、いくら何でもそれはやりすぎだよ」

そう言ってくれる志津音に対して夏帆は言う。

「しずちゃんあなたはいいのよ。こんな争いに関わってはダメ。ね、おとなしく部屋で勉強してなさい。私は今、ヒロの腐った根性叩きなおしてるんだから。それがこいつのためなんだからね」

「そうかもしれないけど……」

「お父さんもお母さんもあなたには期待してるんだから。私たち三人姉弟の中で、唯一しずちゃんだけが、まともなんだから。あなたはこんな下種<sup>げす</sup>な争いに関わってはダメな子なの」

そう言って夏帆は志津音を部屋から追いやった。夏帆は夏帆で志津音のことを特別扱いしていたのだ。

志津音は勉強が出来て、親からは期待されていた。本当に真面目な子で、まるで天然記念物のような子なのだ。

毎月親から、お小遣いをもらうのだが、ヒロシと夏帆はしっかりともらっていた。しかし志津音は違った。「まだ先月もらったお小遣いがあるからいらない」という子なのだ。

そんな志津音は現在、製薬会社で研究員をしている。人のために役に立ちたいという志津音にぴったりの仕事だった。夏帆はネイルサロンに勤めて、ヒロシは建築関係のバイトをしていた。

だが、見た目だけで言えば、夏帆の方が綺麗でスタイルもいい。あれで性格が良ければ言うことないとヒロシはいつも思っていた。

夏帆は男好きのするタイプで、ファッションもわりと露出の高いものを好んで着ている。夏場はほぼミニスカートだ。いや、冬場でもミニの時が多い。

志津音も可愛い顔をしていて、ストレートロングの髪が魅力的なのだが、夏帆よりも若干、肉付きが良くて丸みがある。お世辞にもスタイル抜群までは言えない。中肉中背なのだが、夏帆に比べれば劣る。

これは好みの問題なので、どちらがいいとは決められないが、大抵の男は夏帆の方を選ぶと思う。ヒロシもそれがあるので、きつく当たられても夏帆を憎めないでいるのだ。ただ胸だけ

は志津音の方が大きい。Dカップはあると思う。

そしてヒロシがなぜ実家を出たのかというと、一人暮らしに憧れていたということと、やはり厳しい姉や、うるさい親から離れたと思ったからだった。そんなこともあり、実家の傍に部屋を借りて住んでいるのだ。

だが、夏帆と志津音の一人暮らしは許されなかった。やはり女の子ということが大きかったのだ。親としては娘を心配に思うことは当然だった。志津音はそれで納得したが、夏帆は不満に思っているようだった。

だから夏帆は時々ヒロシの部屋にやってきては、泊っていく。家にいると、何かと親がうるさいとのことで、なるべく家にはいたくないと言っていた。

親にはヒロシの様子を見に行ってくると言っているらしい。父も母もヒロシの部屋に行く分には安心しているようだった。お陰でヒロシはいい迷惑だった。夏帆から離れたと思って一人暮らしを始めたのに、これではまったく意味がなかった。

しかしヒロシも変わってきて、最近では「嫌だ」と言いながらも、夏帆が来るのを期待している自分がいたのだ。社会人になってからの夏帆はますます綺麗になり、会うたびに洗練されているのだ。まんざら嫌でもなかった。

夏帆はヒロシによく言っていた。「あんたと私は馬鹿なんだから。馬鹿は馬鹿なりに生きていくしかないんだからね」と。

ヒロシは勉強ができなかったが、夏帆もあまり好きではなかった。それは自覚しているようだった。ただ志津音の成績が抜群に良かったので、余計にそう思ったのかも知れない。ヒロシから見たら、夏帆は決して馬鹿ではないと思っていた。

志津音はというと、滅多にヒロシの部屋に来ることはないが、電話はたまにある。「元気にしてる？」「ちゃんと食べてる？」「お金はあるの？」など、心配してくれるのだ。

そんな電話もヒロシには嬉しいが、ヒロシは「大丈夫、ありがとう」と言って、結果的には志津音のことを遠ざけているのだ。

決して嫌いではないが、なぜか志津音には遠慮してしまう。それはやはり、変な言い方だが志津音とは住む世界が違くと、なんとなく思っているからだ。

中学生の頃から学年トップの志津音を、とても自分と同類とは思えなかった。夏帆などは「本当に彼女はお父さんとお母さんの子なのかしら」と疑っていたこともあった。

それは半分冗談だが、半分本気のようなだった。そんなこともあって、どちらかというと、ヒロシは夏帆とばかりつるんでいたのだ。結果的には今でもそうだ。

ヒロシは最近になって思う。志津音が心配して電話をくれるのは、もしかしたらこの部屋に遊びに来たいのではないかと。たぶん生真面目な志津音のことだから、何か理由がないと来られないのではないだろうか？ 今度電話があったら、「コンビニ弁当ばかりだから、何か作ってよ」と言ってみようと思っている。